



## 霧ヶ峰のニホンジカが急増

近年、長野県ではニホンジカの生息数が増加して大きな問題になっています。シカが増え過ぎると農林業被害だけでなく、自然林での樹木の剥皮や高山植物を食べるなど、自然植生へも大きな影響を与えます。霧ヶ峰でも、ここ10年あまり前からシカの姿が目立つようになってきました。

霧ヶ峰は八ヶ岳中信高原国立公園に指定され、広大な草原や貴重な高層湿原を有する特徴的な自然景観をもつ高原です。草原は戦後数年くらいまでは、採草地や牧場として管理されてきましたが、現在は観光資源として活用されています。特に、日本有数の高層湿原である八島ヶ原湿原や、ニッコウキスゲの群生はみごとで、観光の目玉となっています。ところが、近年はシカが湿原に入り込んだり、ニッコウキスゲの花芽を食べるなどの影響が始めています。このため、長野県環境保全研究所では霧ヶ峰自然保護センターと共同で、シカの個体群の動向をモニタリングすることを目的に、2004年秋からライトセンサス調査を始めました。

ライトセンサス調査は、夜間に車をゆっくりと走らせて両脇からライトを照らし、光るシカの眼を探して頭数を数える調査です。その結果、2004、2006年の平均発見頭数は20頭前後ではほぼ一定していましたが、2007年春から増加傾向にあり、2008年秋はこれまでの最高の530頭となりました。道路沿いとは別に八島ヶ原湿原でも調査していますが、湿原へも多くのシカが入り込んでいることが確認されました。シカの増加は最初は目立ちませんが、途中から急増するパターンがよく見られます。霧ヶ峰でも今後同様に急増することが予想されます。

八島ヶ原湿原では、すでに踏み跡が目立つようになってきました。湿原では、踏み荒らされたり植物が食べられるだけでなく、排泄物による富栄養化の影響も心配されます。またニッコウキスゲの花芽もかなり食べられていることが確認されています。シカの個体数変動や植生への影響調査は今後とも継続し、対策を検討していく必要があります。寄稿・写真提供/長野県環境保全研究所 専門研究員 岸元良輔



## 設立30周年記念特集号によせて

長野県環境測定分析協会  
会長 阿部 隆 夫

私たち長野県環境測定分析協会は、昭和53年5月8日に長野市の長水会館において設立総会を開催し、「環境保全という時代の要請に積極的に対応していく」ことを目的に、長野県環境計量証明事業協会の名称で発足いたしました。その後22年間は、長野県環境計量証明事業協会として歴史を重ね、平成12年に組織の名称を現在の長野県環境測定分析協会に改め、さまざまな事業に取り組みながら、昨年5月8日に設立30周年を迎え、現在に至っております。

この30年間に取り組んできた主な活動を拾い上げてみますと、設立直後に会員を対象に環境計量証明事業における分析実態調査を行い、さらに技術研究部会を立ち上げて、分析精度確保のためのクロスチェック実施の研究に着手し、2年後には第一回日のクロスチェックを実施しております。以来この事業は毎年継続され、昭和57年からは、長野県のご理解とご支援により行政の各試験機関と合同で行う「統一精度管理試験」として実施され、現在に至るまで二度も途絶えることなく継続してまいりました。このように官民が合同で、分析測定精度の向上と信頼性の確保に取り組むのは、非常に良いやり方であり、大変ありがたく思っております。

また、協会組織の運営面で見ますと、平成6年に新潟県の業界の皆様と信越連絡協議会準備会議を開催し、その後定期開催をするようになりました。そして平成9年からは、山梨県の皆様のご参加も得まして「甲信越環境測定機関協議会」という組織を設立し、毎年各県持ち回りで協議会を開催し、さまざまな情報交換や懸案事項の議論をしながら視察も深めております。

社会貢献事業としては、産業型の公害問題から都市型と呼ばれる環境汚染問題がクロスアップされてくる時代の流れの中で、平成11年に日本陸水学会が実施した「信濃川・富士川水系24時間二斉調査」に水質分析のボランティアとして参加し、その後10年間、天竜川水系と信濃川水系の二斉調査への参加協力をしてまいりました。また、平成18年からは、中国経済の著しい成長に鑑み、当協会独自の取り組みとして、会員の皆様のご協力のもと、県内二斉の雨水調査を開始し、現在も継続しております。こうして、30年間の歴史をたどりますと、本当に様々な活動をしてきたことに、あらためて感慨深いものがあると感じているところでです。

一方で私たちは今、百年に度という世界同時不況のなかで、もがいているという状況ではないかと思えます。私たちのように実体経済の中で生きている者の立場から見ると、なぜこのようなのかが起こるのか、これから先どのようなようになってゆくのか、昔日見当がつかないというのが正直なところだと思います。しかしながら、そんな中でも下ばかり向いているわけにはまいりません。視線をあげて明るくたくましく生き抜いていかなければならぬのは言うまでもありません。

日本経済も世界同時不況の荒波の中で、翻弄されているというところなのだと思いますが、視

点を改めて少し長い目で見た場合、世界は必ず良い方向へ進むと考えるのはよいのではないかと思います。つまり、十億人以上の人口をもつインドと中国の著しい経済発展が続くなかで、これからの経済の立て直しを考え、同時にますます深刻化する温暖化問題や気候変動、微量有害化学物質などへの対策を講じようとするならば、いまままでとおなじ方法では持続可能な経済発展はどこかで破綻するのは明らかです。そうすると、昨今世界中で注目されているグリーンニューディールという方向で、新しい科学技術や各種のコントロールシステムを生み出さなければなりません。何としてもこれを開発しなければならぬとの強い思いから、集中的に努力が払われることで、新技術の開発が大きく進展し、新しく明るい展望が開けてくるのではないかと思うのです。日本の科学技術の進歩には素晴らしいものであり、十分に期待してもよいと思います。

そしてこのことは世界情勢についてだけのことではなく、いま私たちが直面している状況についても、まったく同じことがいえるのではないのでしょうか。この深刻な不況の中を、生き抜いていくためには今までと同じやり方ではだめだと思っております。従ってこれからは、この認識に立って協会活動の方向性も考えていかなければならないと思います。

具体的には、今までと違って本当に私たちに求められているものは何なのか、それを探り当てて新しいサービスや付加価値の創出に、みんなの知恵を集めて取り組んでいくことが必要なのだと思います。その上で、適正価格での取引を実現していく努力が、もう一方で重要なことになって来ると思います。現在の低価格二辺倒の路線では、結局自分たちで自分たちの首を絞めるという結果に陥ることには明白です。社会の進歩につながる新しい付加価値やサービスの創造に努力を傾注し、その価値やサービスに見合う適正な価格での取引を維持することが、結局私たちの携わる事業を水続きする道につながると思います。その意味で、これからはこのような方向で会員同士はもちろんなこと、関係諸機関の皆様との情報交換や意見交換の場を積極的に作り、お互いが共に成長できる新しい道を探し出せるような協会活動にしていきたいと思っております。今後とも皆様のご支援をよろしくお願いいたします。



## 設立30周年によせて



(社)日本環境測定分析協会  
会長 橋場 常 雄

長野県環境測定分析協会が設立30周年を迎えられたことを、心からお慶び申し上げます。

この30年間で環境測定分析に求められるものは大きく変化を遂げました。水質汚濁防止法や大気汚染防止法などに基づく、公害防止を目的としたものから環境保全を目的としたものへと、さらには低濃度かつ長期暴露による健康影響が懸念される物質などを測定分析することが求められてまいりました。ゴルフ場農薬、ダイオキシン類、揮発性有機化合物(VOC)、有害大気汚染物質、アスベスト等々、多様化する社会ニーズに対し貴協会が適切に対応されてきたものと拝察いたしております。

また、精度管理と信頼性の確保という点でも、積極的に

技能試験や統一精度管理試験に代表される外部精度管理に参加されるとともに、自らが行う内部精度管理についても適切な教育研修の機会を提供されているとお聞きしております。

このような地道な活動を通じて長野県の環境行政に著しい貢献をされてきたことに關し多大なる敬意を表するものであります。

さて、(社)日本環境測定分析協会も創立35周年を迎えましたが、この世界的不況が続く中、会員数の減少と平成18年より始めました環境測定分析士試験受験者数の伸び悩みなどにより、非常に厳しい財政状況となっております。すべての面で経費削減とスリム化を行ってまいります。会員へのサポートとサービスは要わりなく実施してまいりますので、貴協会におかれましても、是非とも日環境協の活動への参加とご理解を賜ればと存じます。

今年度もPM2.5の環境基準の設定、改正土壌汚染対策法の施行、低濃度PCB分析法

の制定等で新たなビジネスの展開も期待できますので、今後とも時宜に応じた対応をされるものと思えます。最後に

## 創立30周年をお祝いして



(社)日本環境測定分析協会  
関東支部 支部長 伊 藤 修

なりましたが、今後の貴協会と会員各位のますますのご繁栄を祈念してお祝いの言葉とさせていただきます。

環境政策の面ではそれまでの公害規制型のものから、環境保全型への変遷の時代であったかと思えます。

この年改正された水質汚濁防止法では「総量規制」が導入されています。この「総量規制」は、従来の規制手法が大気汚染や水質汚濁について工場や事業所など排出源からの排出ガスや排水などに含まれる汚染(ないしは汚濁)物質の濃度を対象としてきましたが、その個別規制では地域の望ましい環境を維持することが困難とされた場合には、その規制法を改め、一定の地域内の汚染(ないしは汚濁)物質の排出総量を環境保全上で許容しうる限度にとどめるよう規制する方法であります。

これは個別の排出濃度の規制から環境容量を意識した制度への変化と考えられます。この様な環境容量を考慮した手法はその後の環境政策にと

りいられ、ポジティブ・リフトやベストミックスといった政策がとられています。

こういった環境政策、制度の変化に迅速に対応するため、貴協会におかれましては研修会及び講演会の開催、クロスチェック実施などを通じ協会会員事業所の技術の向上、制度管理の充実等に努められているものと伺っております。平成12年のダイオキシン特別処置法の施行にともない実施された全県共同測定やEJ規制に対応するために「長野県材料分析研究会」設立への参加等、これまでの地道な活動によって今日までご発展を遂げられたことに重ねてお祝い申し上げます。

又、(社)日本環境測定分析協会 関東支部の事業に積極的ご協力とご支援を賜り有難うございます。特に、小諸で開催いたしました第一回関東支部環境セミナー、及び軽井沢で開催しました第十四回関東支部環境セミナーではご担当県として多大なるご尽力を賜り、改めて感謝申し上げます。

最後になりましたが、貴協会ますますのご繁栄をお祈り申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



## お祝いの言葉

長野県環境保全研究所  
所長 牧野内 生 義

長野県環境測定分析協会が昭和53年に長野県環境計量証明事業協会として発足後30周年の節目を迎えられますとともに、参加会員数も設立当初の18社から32社へと大きく発展して来られたことを、心よりお祝い申し上げます。

環境分析は人の生活の安全を守る上で重要な役割を担っており、検査データの信頼性の確保はきわめて重要な課題であります。貴協会におかれましては、このことを深く認識され、毎年技術研修会の開催や研究成果の発表など会員各社の技術研鑽に努めておられますことに敬意を表するとともに、今後とも一層の成果を上げられますようご期待申し上げます。

また、当研究所が中心となつて進めております県の検査精度管理事業にも昭和57年以降、毎年貴協会に所属する多

くの企業にご参加をいただき、長野県内における検査業務の信頼性確保にご協力をいただけてきました。特に今年度からは、本年3月をもって解散しました(社)公害防止管理協会に代わり、本事業における民間計量証明機関全体の窓口としての役割を担っていただくことになり、更なるご協力をお願いいたします。

身近な生活型公害から地球温暖化に代表されるグローバルな地球環境問題まで、きわめて多様化・複雑化している環境問題に的確かつ迅速に対応していくためには、信頼されるデータ、解析結果の提供はもろろんのこと、私ども研究所を含む行政機関と民間機関がそれぞれの立場で協力し補完しあうことが必要不可欠です。当研究所では今後も検査データの信頼性の確保とともに、県民のニーズに的確に対応した調査研究に取り組みしていく所存ですのでご理解とご協力をお願い申し上げます。

貴協会並びに会員各社が今後益々充実・発展されることをご期待申し上げます。お祝いの言葉をこぼしていただきます。

## 創立30周年に寄せて

長野県計量検定所  
所長 岡 沢 正 明

長野県環境測定分析協会が、昭和53年5月に本県の計量証明事業登録事業所の協同団体として創立され、幾多の変遷を経てここに創立30周年を迎えられましたことを心からお祝い申し上げます。

これも歴代の会長様をはじめ役員並びに会員の皆様方の長年に渡る御尽力と御努力の賜であり衷心より敬意を申し上げます。

また、会員の皆様には平素県の計量行政に対しまして格別の御理解と御協力を賜っておりますことに対しまして改めて敬意を表する次第です。

改めて申し上げますまでもなく、環境計量証明事業は計量法に基づき環境に関する濃度・騒音振動等を的確に測定し、一連の事実が真実であることを証明するという市場経済の中では極めて基礎的で重要な

つ重大な役割を担う事業であると認識しております。

近年は地球規模での環境の重要性が特に強く叫ばれ、それに伴い環境測定分析分野におきましても新たな課題が次々と生まれておりますが、会員の皆様方が直面する課題に真摯に向き合い且つそれらを乗り越えて今日の発展につなげて来られたことに尊敬の念を禁じ得ません。

さて、このころ頒発しております食品の偽装表示や不正会計等の不祥事は目に余るものがあり、甚間言われておりました企業の社会的責任(CSR)や法令遵守(コンプライアンス)はどこに行ってしまったのかと思う事態が散見されております。

環境測定分析を含む計量業務は大変地味な業務ではありますけれども、最終顧客である県民・国民等からの信頼を確保する上で必要不可欠な役割を担っておりその重要性は益々高まるものと確信しております。

これからの企業経営は業種・業態を問わず、消費者である顧客の立場に立ち、そのニーズに的確に対応し顧客の信頼を得なければ生き残りは出来

ない時代になっていることを認識すべきであると思えます。そのためには、社員一人一人がお客様重視の考え方をもち、極めの細かい対応を図ることでお客様から絶大な信頼を得ることが決め手となっております。

いずれにいたしましても、「企業を含むあらゆる組織はお客様の支持なしには存在し得ない」との前提で、経営の組織や仕組みを全面的に見直し、経営のクオリティを高めることも視野に入れて組織の抜本的な改革が求められているのではないのでしょうか。

勿論、行政も例外ではありませんので、計量検定所におきましても出来るかぎりの対応を図ってまいりたいと考えております。私どもを取り巻く社会経済情勢は、昨年来のマナー資本主義の崩壊以降大混乱に陥っておりますが、会員の皆様におかれましては改めて自社の役割を再認識いただき、計量検定所を含む関係機関等と連携を密にして直面する難局を克服していただきたいと思います。

終わりに、当協会の益々のご隆盛を祈念申し上げます。お祝いの言葉とさせていただきます。



## 技術部会活動報告

技術部会長 滝澤 光

日頃より技術部会の活動にはご協力をいただき感謝申し上げます。平成20年度の活動報告をいたしますので技術部会の活動をご理解いただけたら幸いです。

20年度活動については、年2回の技術部会を開催し、前年度からの継続事業や半年度事業を7名の技術部会執行委員により協議、検討しながら進めました。以下事業内容を報告します。

## 1 雨水調査

環境汚染の一つに捉えられている酸性雨の実態を把握するため、協会全機関が参加・協力のもとに18年度から雨水調査を実施しています。

4月と5月に県下一斉の降雨について雨水を採取、成分測定することにより、県下各地の水質を比較して状況を把握しようとするものです。分析項目は酸性雨調査で必要とされている、 $\text{pH}$ 、 $\text{Na}^+$ 、 $\text{K}^+$ 、 $\text{Ca}^{2+}$ 、 $\text{Mg}^{2+}$ 、 $\text{NH}_4^+$ 、 $\text{SO}_4^{2-}$ 、 $\text{NO}_3^-$ 、 $\text{Cl}^-$

とし、導電率は任意としました。

また本年度は、採取状況及び測定値に影響を与えると思われる環境を確認するため、採取場所の周辺状況を報告していただき測定結果の評価に活用しました。

4月9日、11日及び5月9日、12日の各1回、計2回、県下一斉に雨降りとなる天候を見計らって執行部より実施日を各機関に連絡し、雨水の採取、分析をお願いしました。

参加・報告30機関、6月に測定結果報告を受け、21年3月に解析を完了しました。20年度のみならず18年からの3年間の状況をとりまとめ、当協会の技術部会で報告する予定でいます。また、この雨水調査は今後も継続する予定でいます。

## 2 精度管理調査への参加

長野県公害防止管理協会、長野県環境保全研究所主催による精度管理調査への参加を呼びかけました。参加機関数や不参加の理由を掌握するとともに、できるだけ多くの機関が参加し技術の確認・向上

に役立てていただきたいとの思いがあります。このため協会では参加料の補助もしています。

とりまとめられた解析結果は平成21年2月10日に開催されました環境保全研究所による「精度管理結果報告会」にて詳細に報告され、参加機関はそれをもって各自で状況を把握していただきました。参加機関26、項目別では細菌数4、医薬品4、砒素25、COD26でした。会員機関は環境測定分析を主としていたため、実施項目では日頃扱っている砒素、CODに集中しました。日頃扱っている項目がないとする機関が不参加となりました。

## 3 技術研修会

昨年の技術研修会終了後、東京都地質業協会によるアンケートが実施され、その中に地下水に係る調査についての講義の希望がありましたので、これを受けて地下水及び地表水に係る講義としました。平成20年10月30日ホテルモントーニ松本において、17機関より30名の参加のもとで(独)土木研究所・

小森行也氏からは「地表水に係る諸問題」と題し、資源としての水から始まり、水質汚染、汚染の中で調査途上である内分泌かく乱作用のある残留医薬品等について講義していただきました。(社)日本工業用水協会・野間泰二氏からは「地下水に係る諸問題」と題し、地下水の循環、水質などの地下水の要素、地下水調査の基本等について講義をしていただきました。

なお、この研修会では、研究発表の場としての役割も果たすため、(社)上田薬師会・堀邦昌氏より「水生昆虫調査への取り組み」と題して河川における汚染状況と水生昆虫との関係の発表をしていただきました。

## 4 研究発表

日本環境測定分析協会関東支部に属していることにより、支部環境セミナーにおける研究発表を呼びかけました。発表する機関を確保するため、会員の班分けによる順番制を取り入れたり、研究助成金制度も用意してはありますが、発表に手を

上げていただくにはなかなか厳しい状況にあります。

このような中で日本環境測定分析協会関東支部セミナー及び長野県環境測定分析協会技術研修会には(社)上田薬師会・堀邦昌氏より「水生昆虫調査への取り組み」と題して河川における汚染状況と水生昆虫との関係の発表をしていただきました。長野県環境科学発表会には(社)長野市薬師会・武田淳志氏より「レジオネラ菌を指標とした浴場内衛生管理状況調査について」と題して発表していただきました。

日々の業務の中で研究発表の準備をしていたたぐのは発表者にとって大きな負担となっている様子が見受けられますので、技術部会として多くのことが問われています。







## わが社の

## ニューフェイス

第7回

(社)上田南商會

吉原昌志さん

## 社会的責任の

大きさを痛感

2007年の世相を表す漢字1字は「偽」という文字でした。ニュースでは頻りに食品の偽装問題等が報道されており、正しい真の情報を提供する、測定分析業務は社会的責任の大きい仕事だと思えます。こういったやりがいのある職種に携われることに大変喜びを感じております。

それと同時に分析という作業には常に細心の注意が払われていますが、一旦報告された測定値はともすれば数値だけが一人歩きし、大変な事態

を引き起こしかねません。常に緊張感を持って業務をこなさなければ、というプレッシャーを感じております。

今はまだ入社して間もないので、右も左もわからない状況ですが、1日も早く業務を一人前にこなせるよう努力し、また業務上必要な資格取得に向けて学んでいきたいと思っております。



## 事業所訪問

第7回

上田市

## 株式会社東信公害研究所

昭和52年「美しい大地を次の世代に」をモットーに、浄化槽維持管理

業務を開始、その後、環境計量証明、建築物(飲料水水質検査、飲料水貯水槽清掃、空気環境測定)、土壌汚染対策法

に基づく指定調査機関、臭気測定、環境機器販売等、顧客のニーズに答えるべく、これらの業務に取り組みんでいます。

平成12年に、社名を現社名に変更し、新たな

分野への取り組みを視野に入れ、情報収集に力を入れています。

昨年は、温泉法の改正に伴う温泉施設の可燃性天然ガス測定、ガス低減対策のコンサル業務を開始しました。

現在の環境問題は多様化しており、分折関連業務では、新たな物質の測定方法への取り組みのため、機器の整備等設備投資に費用がかかります。また、昨年あたりから世界の全体の不況に影響を受けている多くの企業が、人員、経費の削減を行うなか、企業間のダンピングによる経営圧迫など、油断の許さない大変な時期となっています。

当社も、単価の見直しなど求められる中、環境に配慮し、経費削減などに取り組んでいます。

当社も一人、一人が、資格の取得、さらなる技術のレベルアップをはかり、より多くのユーザーから信頼される企業となるべく努力しています。





## 第8回

## 長環協ゴルフコンペ開催

総務部会

本年は梅雨前の爽やかな青緑時の開催となりました。今回も参加者の行いの良さが証明され、少しリッチな軽井沢の爽やかな風、小鳥の囀り、植込みの花が咲乱れ心を洗われる様な環境で賛助会員の参加1名、3組8人の参加で少数精鋭のコンペとなりました。お互い鍋を削りあいながら幅広く懇親を深め楽しい1日でした。結果は横山昌夫さんの初優勝になり本人も実力と運の良さに大喜びでした。

(大量の賞品・カップに満足、3番ミドルホールで10打ってましたか?) 準優勝の清澤さんは前大会も同じ成績でした。又3位の杉崎さんは実力(B・G、バーディー2つ)が運と噛み合いませんでした。参加賞の賞品も少し良くしてとの意見も出しましたが、ともあれ笑顔で来年に向け闘志を秘めて散会しました。



◆開催日/平成20年6月14日(土曜日) ◆会場/中軽井沢カントリークラブ ◆時間/8時42分スタート ◆競技方法/18ホール・新ベリア ◆費用/プレー・飲食費は各自負担 ◆競技結果

| 順位  | 氏名・所属            | OUT | IN | GROSS | H.C. | NET  | 備考 |
|-----|------------------|-----|----|-------|------|------|----|
| 優勝  | 横山昌夫 (ES7P/バイザー) | 50  | 50 | 100   | 28.8 | 71.2 |    |
| 準優勝 | 清沢 淳 (理学)        | 46  | 45 | 91    | 16.8 | 74.2 |    |
| 三 位 | 杉崎 勝明 (長環協副会長)   | 43  | 40 | 83    | 8.4  | 74.6 | BG |

## 優勝者インタビュー



ES7P/バイザー 横山昌夫さん

第1組の1番手。参加者全員が見ている前のティーショットは、経験者にしか判らない緊張感。その影響(?)が、一発で出たバンカーは皆無で、一日中砂、砂、砂。それでも、どうにかラウンド終了。幹事代行のため、早々にお風呂を済ませてフロントで成績表…。と、何とHD28.4もついて、私がトップ、うそお……?ダボ以上が全て大当たり、ネットでアンダーなんぞ、当然初めて。これも、同伴競技者の皆様のおかげです。好天でのラウンド最高でした。ありがとうございます。

先に開催された技術研修会(前ページ記事参照)終了後、講師2名、研究事例発表者である上田市薬剤師会・堀邦昌さん、日本環境分析協会、当会役員、賛助会員を交えて参加技術者による交流会が開催されました。

日頃、個人が抱えている悩み、講師の方への講演に関連した質問、趣味の事など、さまざまな話題が少しのアルコールも潤滑剤となり、活発に飛び交いました。

仕事では見られない個性や意外な一面などもお互いに発見出来、楽しい笑い声と和やかな笑顔の中、あつと言う間に時間が過ぎました。

ともあれ参加者同士の懇親を深め

## 技術者交流会開催

技術部会

平成20年10月30日 ホテルモンターニユ松本にて

られ、日頃、何かと神経を使う仕事が多い中、ストレスの解消にもなり大変有意義なひと時を過ごすことができました。次回も機会がありましたら多数の参加者をお待ちしています

研究事例を発表いただいた上田市薬剤師会・堀邦昌さんに感謝状が贈呈されました。



県環境測定分析協会技術研修会



## 私の趣味自慢

株式会社トーエー

中島康光さん

私が小さい頃、というのは今から30年ほど前のことになりましたが、雨上がりのあぜ道に大きなヒキガエルが産卵しているのをしばしば見かけました。その圧倒的な存在感に、畏敬の念にも似た気持ちを抱きました。最近ではあまり見かけなくなつたこのヒキガエル。しかし、いるところにはいるのです。

毎年4月の下旬になると、県内の某所にてアズマヒキガエルが産卵のために山から下りてきます。自分が生まれた池を目指してくるのですが、ほんの一週間の間に何百というカエルが一斉に集まるのです。特に夜になるとその数を増し、あたり一面カエルだらけになります。この神秘的とも言える光景を見に行くのが、私の年に一度の楽しみとなっております。

ヒキガエルといえば毒をもつことで知られていますが、このアズマヒキガエルの性格は温厚かつ安閑、乱暴なことさえしなければ、素手で触っても問題ありません。しかし温厚なカエル達も、産卵前には文字通りのカエル合戦を繰り広げます。少ないメスをめぐって多くのオスが激しい闘いを争うのです。命を落とすことさえ珍しくはない。



まさに決死のバトルです。産卵の時期を過ぎると、カエル達は忽然と姿を消します。普段は山に隠れているといわれていますが、探そうと思つてもなかなか見つかるものではありません。この時期を逃すと、カエルがいることすら知らずに過ぎてしまふのです。

平成18年の水害の際には、彼の地もあちこちで土砂崩れが起き、カエル達の安否が心配されましたが、幸いその後も毎年姿を現しています。一つ気がかりなのは、今なお行なわれている水害対策工事です。カエルの卵やオタマジャクシはコンクリートのアルカリ分に弱く、濃度が上がると溶けてしまうといわれています。もちろん今後の災害を防ぐためにも護岸やえん堤の建設はやむを得ない事ですので、ぜひ野生動物や自然環境に配慮した工法を用いて、貴重な財産を失うことの無いようにして頂きたいものです。

## 賛助会員ご紹介

## 株式会社北信理化

当社は昭和26年に設立し、近々60年を迎える節目を迎えます。当初はカメラ、写真材料販売の店舗営業と理科の実験器具を始めとし、小中学校高等学校への理化学機器販売営業を行つてまいりました。

その後日本経済の飛躍的成長期には、理化学・分析機器の需要は一気に高まり、営業品目も増え、客層も従来の各学校のみならず、大学・官庁・民間企業を加え、事業拡大を図つてまいりました。昭和41年9月には松本営業所を開設し、長野県全域に販売網を確立致しました。

近年は最先端技術研究に寄与できる分析機器・計測器だけでなく、生産ライン向けの評価装置・検査装置を手掛け、幅広い分野で当装置をお使いいただいております。

- 当社の社是は
- 一、 社業は誠実を旨とし、お客様様の心を以つて心とすべし。
  - 一、 接客は清新を旨とし、全ての人をお客様と心得るべし。
  - 一、 進取の気迫を以つて社業にあり、あらゆる事を迅速果敢に処理すべし。
  - 一、 商品知識を深め、教養の涵養に努むべし。
  - 一、 日々反省のもと計画を綿密にし、遅滞なく行動すべし。

以上五項目から成り、創業者の経営理念を常に忘れる事なく、毎朝唱和しております。

技術革新の著しい中、多様化するニーズにお応え出来ず、努力してまいります。特に当社はサービス体制の強化を今後にも図り、お客様にとって一番大切な分析機器の「精度管理」に付いて、正確分析が常に維持出来すよう、お手伝いさせていただきます。如いては長野県分析技術の向上に繋がれば、この上ない喜びと願つております。

今、地球にとって大切な「環境」空気・水・土壌等一つ一つを見つめ、子・孫の世代に素晴らしい贈り物として残せるよう、皆様方と歩んでまいります。



・本社：〒380-0918 長野市アークス5番7号  
 ・松本支店：〒389-0033 松本市田舎7800番地52



## 編集後記

危惧されていたサブプライムローンがリーマンショックを機として経済危機の津波により、全世界の経済を一気に不況へと追いやり、早や半年がすぎようとしています。

国内の自動車産業を代表とする製造業は生産調整をやむなくされ、9000社から3000社もの系列下の下請けを抱える機械製造業界各社も打撃を受け、ソニーは2010年度も赤字決算が見込まれている。またフタを発生源とするインフルエンザも世界の人々を震撼させ、観光等のサービス産業にも多大な影響を与えた。

自動車業界では既にフル稼働を行っている所や、多くは5月からは稼働を戻しつつあり、遅いところでも夏には調整が完了の見通しとなっている。またインフルエンザもすでに終息へと向かっている。

環境計量証明業界も価格及び需約にも低迷傾向にあるところに大変な影響を受けております。経済の回復を早期に望むところですが、回復しても仕事の量また価格が回復するかは大変危惧するところではあります。

当協会も30周年を迎え、四半世紀をとうに過ぎ、産業としては別段疲弊が起きておらず不況はありませんが、環境計量証明事業にも「ニューディール」が必要ではないでしょうか。

発行 長野県環境測定分析協会  
 編集 中島康光  
 印刷 長野県長野市山崎町1-1-1  
 TEL:026-227-1111  
 FAX:026-227-1112  
 〒380-0918 長野市アークス5番7号  
 〒389-0033 松本市田舎7800番地52  
 代表取締役 中島康光  
 取締役 小島 浩一  
 取締役 小島 浩二  
 取締役 小島 浩三  
 取締役 小島 浩四  
 取締役 小島 浩五  
 取締役 小島 浩六  
 取締役 小島 浩七  
 取締役 小島 浩八  
 取締役 小島 浩九  
 取締役 小島 浩十  
 取締役 小島 浩十一  
 取締役 小島 浩十二  
 取締役 小島 浩十三  
 取締役 小島 浩十四  
 取締役 小島 浩十五  
 取締役 小島 浩十六  
 取締役 小島 浩十七  
 取締役 小島 浩十八  
 取締役 小島 浩十九  
 取締役 小島 浩二十